

成人発達理論の再検討

—役割移行を前提としない現代成人の語りを通して—

大阪大学大学院人間科学研究科 臨床心理学研究分野／修士1年 武内紫衣奈

【第1章】研究の背景と問題意識

従来の成人発達研究では、就職・結婚・出産・子育てなどのライフイベントや役割移行を発達の契機として捉えてきた。しかし現代では、非婚、DINKs、転職の反復、学び直し、親の介護など、生き方そのものが多様化している。

その結果、従来の発達理論が想定してきた役割移行を経験しないまま成人期を過ごす人も増えている。そこで本研究では、外的な転機や役割移行がなくとも進行する内的な価値観や自己概念の再編成過程を「役割移行なき発達」として捉え、その特徴を明らかにしたい。

【第2章】研究目的

現代成人のライフコースを可視化・類型化し、そのライフコースを生きる人々の語りを通して、現代における成人発達と人生再構成のあり方を明らかにする。

最終的には、「現代成人の発達モデル」の構築を目指す。

【第3章】理論的背景

先行研究では、岡本が中年期のアイデンティティ再体制化を通して、外的転機が乏しい状況でも発達が生じうることを示している。また中山は中年期の発達を危機・模索・軌道修正・再確定というプロセスとして整理し、白井はアイデンティティが生涯にわたって再構成されることを指摘している。

本研究はこれらの知見を踏まえつつ、現代の多様なライフコースの中で発達をどのように捉え直せるかを検討する。

【3-1】先行研究

- 岡本（1986, 1994, 2002）
 - 中年期におけるアイデンティティの再体制化過程を分析し、外的転機が乏しい状況でも内面的な問い直しや意味づけの再編によって発達が生じることを明らかにした。
- 中山（2020）
 - 中年期のアイデンティティ再体制化プロセスを、危機、模索、軌道修正転換、再確定の4段階

階で示し、主体的作用性や共同の関係性といった内的希求と、文化的要請を動機づけとし、次世代への関心や行動を通じてジェネラティヴィティを高め、その経験を語り内省することでアイデンティティを統合していくと述べた。

- 白井ら（2020）
 - ▶ アイデンティティが青年期に完結せず、生涯にわたって再構成される性質を持つことを示し、成人期発達を「再構成的プロセス」として位置づけた。
- こうした先行研究が示すように、成人期の発達を理解する上では、単なる行動の変化ではなく、自己経験を振り返り、それを意味づけ直すプロセスに注目する必要がある。

【第4章】現代成人ライフコースのマッピング

まず文献研究に加え、SNS、ブログ、note、自伝、エッセイなどの語りを収集し、現代成人のライフコースを探索的に整理する。

目的は、岡本（1994）の「ライフサイクルの木」の現代版を作成することである。

現時点では、以下のような仮説的類型として想定しているが、研究の進展に応じて修正を行う。

- 非婚キャリア型
- 晩婚・子育て型
- DINKs 型
- 転職探索型
- 学び直し型

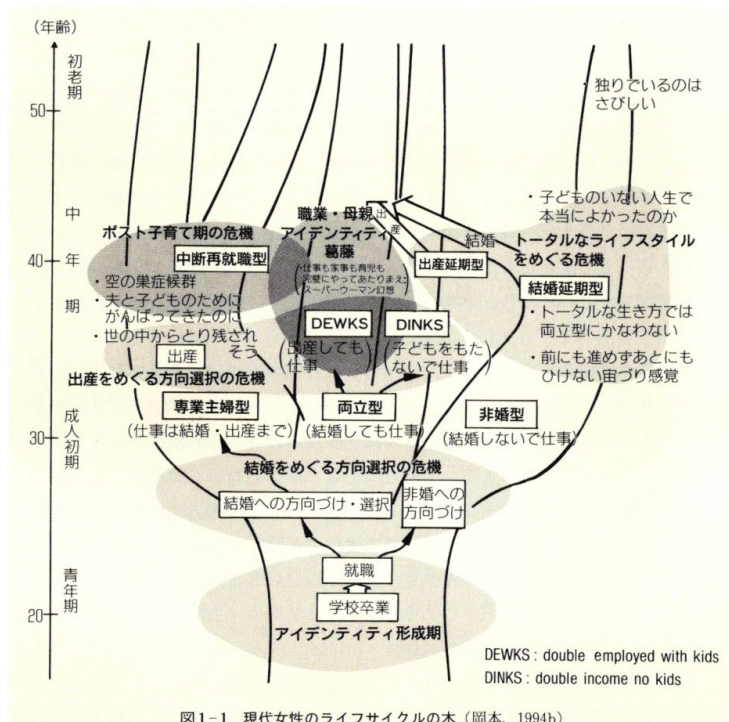


図 1-1 現代女性のライフサイクルの木（岡本，1994b）

図 1 岡本（1994）の「ライフサイクルの木」

【第5章】ライフコース類型ごとのインタビュー研究

マッピングで得られた類型をもとに、複数のライフコース群へのライフストーリー・インタビューを実施する。

対象としては、以下のような類型を想定している。

- 比較的伝統的なライフコース群
- 非婚・未婚群
- 転職や学び直しを繰り返した群
- 離婚や介護を経験した群

類型間の比較だけでなく、同じ類型内でどのような意味づけの違いが存在するのかにも注目する。

【第6章】分析方法の検討

分析方法については現在検討中であり、研究目的に応じて複数の方法を組み合わせる可能性がある。

語りの構造や自己の連続性を検討するナラティブ分析、人生経路の分岐を可視化する TEM、発達過程の概念生成を行う M-GTA、時間的展望理論を用いた分析、NPCS による語りの統合性評価などを候補としている。

またレビンソンのライフサイクル理論との比較を通じて、現代成人においても従来の発達段階が見出されるのか、それとも新たな発達パターンが存在するのかを検討したい。

【6-1】ナラティブ分析：

語りの構造や意味づけの変化に着目し、

- 人生経験をどのように理解しているか
- 過去・現在・未来をどのようにつないでいるか
- 自己の連続性をどのように構築しているか

を分析する。

特に野村（2002, 2005）の整合一貫性モデルを参考に、

- 時間的一貫性
- 因果的一貫性
- 主題的一貫性
- 状況的一貫性

といった観点から検討する可能性がある。

【6-2】 TEM（複線径路等至性モデリング）

同じライフコース類型の中でも異なる人生経路が存在することを前提とし、

- どのような経験が分岐点となるのか
- 発達や人生再構成に至るプロセスはどのようなものか

を可視化する方法として活用を検討している。

【6-3】 M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）

ライフコースの意味づけや発達過程に共通する概念を抽出し、

- 発達感
- 停滞感
- 自己再構成
- 人生の方向づけ

などのプロセスモデルを生成する手法として検討している。

【6-4】 時間的展望からの分析

白井（1994, 2009, 2022）の時間的展望理論を参考に、

- 過去の経験
- 現在の自己理解
- 将来への見通し

がどのように関連づけられているかを分析する可能性がある。

【6-5】 NPCCS（Narrative Process Coding System）

必要に応じて、

- 省察の深さ
- 意味生成の程度
- 語りの統合性

を検討する補助的指標として活用する可能性がある。

【6-6】 ライフサイクル分析（レビンソンの発達理論との比較）

レビンソン（1978, 1996）のライフサイクル理論を参照し、語られた人生経験を発達段階ごとに整理する方法も検討している。

具体的には、成人への過渡期、大人の世界に入る時期、30歳の過渡期、成人前期の最盛期、中年への

移行期などの発達段階に沿って人生経験を配置し、各時期における課題や自己理解の変化を検討する。

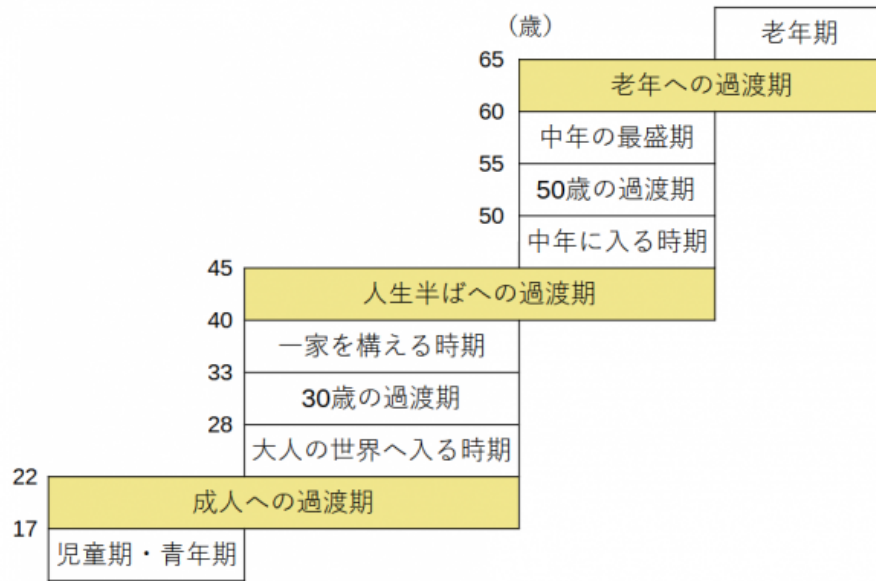


図 2 ダニエル・レビンソンの発達段階説

本分析では、レビンソンの発達段階を前提として適用するのではなく、

- 現代成人のライフコースにおいても同様の発達段階が見出されるのか
- 非婚者や転職経験者などの非典型的ライフコースにおいてはどのような差異がみられるのか
- 外的な役割移行や転機を伴わない場合にも発達の再構成が生じるのか

を検討するための比較枠組みとして活用することを想定している。

【6-7】対象とデータ収集

- 対象は 30～50 代の成人を想定している。
- インタビュー対象者の選定については、ライフコース類型化の結果を踏まえて決定する予定であるが、各類型数名程度を対象とした半構造化インタビューを実施することを想定している。
- 募集方法としては目的的サンプリングを基本とし、必要に応じてスノーボールサンプリングを併用する。
- インタビューでは、以下のような観点から聴取する。
 - ライフヒストリー、人生の意味づけ
 - 人生の転機
 - 現在の生活構造
 - 将来展望

【第7章】研究の意義

- 本研究は、ライフコース研究と成人発達研究を接続する試みである。
- 理論的には、レビンソンなど既存の成人発達理論を現代社会に即して再検討し、「転機」や「生活構造」の概念を更新する可能性を持つ。
- 実証的には、多様なライフコースを生きる成人がどのように人生経験を意味づけ、自己の連続性を維持しているのかを明らかにできる。
- また臨床的には、キャリア支援、リワーク支援、中年期支援、ナラティブ・アプローチなどにおいて、語りを通じた自己再構成やライフキャリア・レジリエンスを支える理論的基盤を提供することが期待される。
-

大阪大学大学院人間科学研究科

臨床心理学研究分野／修士1年

E-mail (学内) : u799574k@ecs.osaka-u.ac.jp

E-mail (PC) : shiina.takeuchi@gmail.com

TEL (携帯電話) : 080-4048-6964

武内紫衣奈
